

令和5年度 地域貢献事業活動報告書

1 事業名称	男女共同参画社会の構築に向けた教育課題・地域課題の探究
2 事業推進者等	(責任者職名・氏名) 教授・宮下敏恵
3 学外の連携機関等	(連携機関等名) NPO 法人柿崎コンシェルジュ 上越市総合政策部 上越市創造行政研究所 上越市男女共同参画推進センター 新潟県立看護大 (担当者職名・氏名) 教授・佐藤ゆかり 准教授・堀健志
4 事業の趣旨・目的	<p>本事業の目的は、上越市教育コラボを始めとする様々な機会を設けて、「男女共同参画社会の構築に向けた教育課題・地域課題の探究」をテーマとしたワークショップを継続して開催することにある。一連のワークショップにおいて、世代(年齢)・性別・職業の異なる人々、すなわち、学生および大学教職員、地域住民がそれぞれに抱えている問題意識や状況認識を交錯させることを通じて、「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」(2019年12月20日閣議決定)が掲げる「将来にわたって「活力のある社会」の実現」を目指して、上越地域が取り組むべき課題をあぶり出す。</p> <p>上記の国家戦略は、人口減少の趨勢を受け入れた上で、人口減少を和らげることを重要課題として設定している。それは、戦後日本において、一人の女性が生涯にわたって産む子どもの数(合計特殊出生率)が長期的に低落して少子化が進むなかで、いくつかの少子化対策が打ち出されてきたものの、それらの対策のほとんどが不発に終わったからである。「第二次ベビーブーム世代」と呼ばれるコーホートを中心とした年齢層の女性は50歳前後となり、さらなる少子化の進行が決定的となっているが、その結果として生じるさらなる急激な人口減少というマクロな事態にどう向き合うかが重要な課題であることは間違いない。とはいえ、こうしたマクロな課題に取り組む上で、産む／産まないという選択を「決定」する当の女性たちが直面している生きづらさを和らげることは、極めて重要な課題となるだろう。これまでの少子化対策が不発に終わった理由は複合的であるが、その背景には、出産の意思があるにもかかわらず、理想とする人数の子どもの出産を阻むさまざまな社会的諸条件(=生きづらさ)があると考えられるからである。</p> <p>こうした生きづらさを理解して、状況を変えていくことは一人一人の生にとって有益であることはもちろんのこと、男女共同参画社会を築く上でも、「活力のある社会」の実現という「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の課題に取り組む上でも有益であるだろう。本事業は、上越市教育コラボだけではなく、それ以外の時期にもワークショップを継続的に開催することで、上越地域での生活実態に即して一人一人の生きづらさにねらいを定めながら、男女共同参画社会を築く上での教育課題・地域課題を探究することで、「活力ある社会」の実現に向けて上越地域が取り組むべき課題をあぶり出そうとするものである。</p>

<p>5 事業活動報告</p>	<p>① 2023年6月25日に「ジェンダー&セクシュアリティ・フォーラム」の公開研究会をオンラインで開催した。令和4年度上越教育大学大学院学校教育研究科幼年教育領域修了の佐々木智哉氏により「男性保育者の生存戦略—『身体的男らしさ』と『経済的男らしさ』に着目して—」の修士論文について発表が行われた。その後参加者と意見交換を行った。参加者は8名であった。</p>  <p>② 2023年11月18日の上越市教育コラボにおいて、ワークショップを開催し、本事業の目的に照らして有効であると考えられる映画「ある少年の告白」を上映し、その後参加者とフリートークを行った。参加者は16名であった。</p>  <p>③ 2024年2月10日において、「ジェンダー&セクシュアリティ・フォーラム」を上越教育大学において開催した。映画「パットマン」を上映し、その後参加者とフリートークを行った。参加者は12名であった。</p> 
<p>6 本事業で得られた成果</p>	<p>以上の3回にわたる企画を開催することで、以下の4点の成果が得られた。第1に、本学において必ずしも十分に保障されているとは言いがたい、ジェンダー／セクシュアリティをめぐる学びの場を提供したことで、このテーマに関心を抱く学生の間に新たなつながりが生まれた。その結果として、企画運営スタッフとして取り組むことを希望する学生が現れたが、このことは成果の二つ目として数えることができるだろう。また、成果の三つ目として、学部1年生を対象とした科目「身体で学ぶ？ ジェンダー入門」の開講（2024年度）を挙げたい。当事業と連動させることを念頭に置いて企画されたこの科目の開講は、今年度の成果というよりはむしろ、これまでの3年間にわたる事業継続の成果として位置づけるべきかもしれないが、いずれにしても、本学が提供する教育内容の充実につながるものと評価できるだろう。また、第4に、当事業のスタッフを務める学生による、上越市の男女共同参画サポーター企画「アンコンシャス・バイアスを知ろう！」への参加協力である。本事業が契機となって本学学生と地域社会とのつながりが生じたところがあり、間接的であるとはいえ、本事業の成果と言えるだろう。</p>
<p>7 その他(成果物等の名称)</p>	